

日蓮宗の安心を讀む

古愚學人

龍山

清水先生及び高田先生の御玉稿は印刷半に頂きましたので不得止こゝに掲げました。

依て兩先生の御諒解を乞ふ次第であります。

啓、高著「日蓮宗の安心」御寄贈當時先づ卷頭言を讀み、冒頭の「予をして宗學に志さしめたるは實に吾清水龍山先生である、乃至、茲に清水先生多年の教恩を感謝、以て知恩報恩の一端に擬する次第である」を讀みて吾子が謙虛他を推す美德に感激と同時に、「唯先生と見解の少しく異なるは事の一念三千の解釋、本尊の入法教觀、受持成佛の因果二徳云云」を讀みて、設へ「少しの異り」にもせよ、此は是れ究竟の宗要なり。此にして設へ「少しにても異なる」とせば、容易に讀過すべきにあらず。請ふ著中休暇を待つて熟讀靜思せんと。乃ち先づ豚兒龍淵に付して近く吾子に授業に先ちて熟讀せしめ、自分は昨春立正講座に於ける立正安國論講義の速記訂正に專注せり。然るに頃日此業も既に初再

校をも了し、少しく清閑を得たるを以て一昨日來一通讀了、乃ち乍延引茲に讀餘感を申上候。

昭和七年九月念八日

古愚 學人

八 朶 學 人 榻 下

一。序言に、自家研究の功を他に推す其美德現代復他に見るべからず、予豈慚愧に禁んや。然れども予や一吾子を得て、設へ今死するも、宗學界に多少の貢獻する所あるを喜ぶ。予恒に言ふ、田中居士にして設へ一著書なくとも、山川氏の著書あり、以て居士が明治、大正、昭和の宗學界に於ける功績は、方に導、輝二先哲に亞ぐ矣と。予の會下吾子の外に中谷良英ありと雖も、彼や宗學に於て的確、加ふるに信念堅固、惜むらくは文筆素樸發表に拙、果して吾子に亞ぐを得るや否や。由來付法其人を得る洵に難し、嗚呼予や固陋、老來尺退ありて寸進なし。切に望む、吾子請ふ愈々勉め、益々精ふせよ焉。

いかにも吾子の言ふ如く、吾子が台當教義に興味を感じたるは第二學區中檀林貞松第一分教場が吾甲府第二分教場に併合（八朶云く、「安心」序言に、當時貞松慈師が中檀林長にして、今の望月祖山法主が普通學校長と記せしは記憶の誤りにして、慈師が中檀林長兼校長たりし事を卒業證書に依りて知り得たり。而して吾清水學士が實務に當られたりしなり。）予が十不二門指要鈔、開、本兩鈔、祖

書綱要刪略等を授業せし際に在りしことは、予にも確に反響感應ありたり。吾子が宗義筆述の初陣も亦實に此時に在り。「旃檀」第一、二輯は當時宗門唯一の學報にして、第一（池上）第二（京都）學區生をして羨望せしめたり。吾子が「本尊鈔要義」の如き、今にして之を見るも立派なる學說稿なり。明治三十七年學制變更東京に轉じて已後は、中學五年に僅に講授せしのみ。隨つて吾子が宗學上の格段の進境も見ず。只時々面晤或は通信に依りて教義の往復のみ。然るに今此書の百尺竿頭、超越的進歩、是れ決して予の力與らず、全く吾子が謂ゆる「自解佛乘」「玄悟法華円意」なり、深く感歎敬意を表す。

二。本論に入りて一二卑見なきに非ず。又貴發揮の稱揚すべきもの少からずと雖も、俱に省略して、前記序言に謂ゆる、

（一）「事の一念三千の解釋の異」に就き檢討するに何等異義を認めず。即ち本尊と題目とは事の一念三千の能所觀定慧の二法にして、佛界所具の九界本佛の子なる我れが、「一心欲見佛、不自惜身命」の戀慕渴仰信念口唱（妙觀）の處に、「時我及衆僧、俱出靈鷲山」（妙境）即ち「事の一念三千の觀心」は在り。此境や觀や俱に唯一信之家の能所定慧にして、是れ此を「信行觀心」と謂ふ、「事の一念三千の解釋」復他に求むべからざる也。

(二) 本尊の人法教觀、(イ) 人法は全同、但し予の佐前は法正人傍、佐後は人正法傍の辨は、専ら祖判即ち祖師の外用解釋に従ふ。若し御内證に據れば、勿論貴説の如く佐前後一貫して法佛不二而二、二而不二なるべし。

(ロ) 本尊の教觀に就ては輝上は教觀具足と言ひながら、而も動もすれば主觀的己心本尊、行者本尊に墮して、客觀的信仰の對象、所觀の妙境としての本佛本尊を忘れんとする、即ち子が父を蔑かみせんとする傾向を矯正せんが爲めに、予は教觀不二の中に就て、若し而二門の場合は本尊の主体は本佛也、父也、我等は子也。子は其体内に懷かれ居るものなること本尊の相貌の如し。即ち本尊全幅は本佛の全象總体にして、我等は則ち其所具の別相也。教本佛が主、正、表にして、觀己心は客、傍、裏と謂ひたきなり。

(三) 「受持成佛の因果二徳の解釋」是亦異義を認めず。所持の五字既に因果の功德聚なり。故に能持の我等之を受持するに自然に其功德を讓與せらる。言ふ所の自然とは智慧を須すひず、但信心だにあればちのづからの意即ち以信代慧なり。此旨亦拙著本尊論及觀心本尊鈔大旨、特に學報記念號の「聖日蓮の佛教統一」等に本尊鈔と四信五品鈔、持法華問答鈔を對説全く貴説と一致。

但だ(一) 貴説唱題の妙行を「從因至果、始覺門」と謂ふは語足らず、宜しく「從果 本覺果体 向因

不迷而達 本覺が之家の從因至果、始覺門」と謂ふべし。向記の「本果よりは本因を宗と爲す」とは、本果の法体、本覺無作の性徳門よりは本因修徳、始本不二無作之作なる妙行を宗趣とするの意なり。天台既に「稱_ヲ性_ヲ、本有_ニ謂_フ頓_ヲ、行_ト」と云へり。即ち無作之作本有_ヲ（本覺）妙行（始覺）也。

又（二）「以信代慧」の慧は果分の佛慧に非ずして、我等因分の信以て三學の慧に代ふる戒定慧の慧也。但信唱題の意也。貴著二三九末行の本妙師謬る。若し御義（上、廿八紙）の「信は價の如く、解は寶の如し、三世の諸佛の智慧をかうは信の一字也」の「かう」は「質」にて貿易の義なり。以_レ信代_レ慧_ニの代とは義別也。慧を質ふと慧に代ふと揀べ焉、揀べ焉。今より二十年前吾日蓮宗大學某教授一たび此を濫同せしより、學報等に屢々混用を見る。乃ち因に茲に計す焉。

已上讀餘所感草々不悉。

昭和七年九月念八、午后午餐を忘れて卒記。

追曰、（一）前陳の如く貴發揮の稱揚すべきを省略したりしが、本佛觀の日本天台と當家との異同は予が大正八年述の「法華經要義」に後日の研究を期したる所を辨駁して殆ど遺憾なきものゝ如し、敬服。貴謂ゆる理法身中古天台と始即本の法身當家を、予は單体無用の理法身（東台兩密及慧心の本覺無作）と俱体俱用の事法身（我家）と稱呼す、妙ならずや。

(二) 嶋地師の尊海は我宗の史傳に従ふたものにして、別に史的考證に據りたるものならざること別紙裕師が回答の如し。

拜復、九月廿八日附御手紙拜見、初めて御意得候。早速御返事申すべき筈のところ、差し迫て整理致すべき事項有之候ひし爲今日迄延引失禮仕り候。

就ては嶋地先生の天台教學史附録の系脈は、先生御在世中自ら私案を整理して印刷に付せしもの遺り居り候爲め、參考として私に之を附録として掲載致し候ものに有之候。然る處嶋地先生の遺稿中には、不幸にして四頓房尊海と日蓮上人との關係交渉、若しくは尊海その人に付て特に考證せられたるものは見出し得ざるものゝ如くに有之候。從て右に關する先生の御意見は、今日に至つては全く聞き得ざる所にして、甚遺憾と存じ候。尤も小生は島智良師の御力作、次では岡教遂師の論文等を拜見、恐く其の御意見の如くなるべしと信じ居候へ共、何分にも先生御自身印刷にまで附せしもの有之候爲め不取敢も私見を以て取捨を加へず、其の儘掲載致し置候次第御了承下され度候。實は天台教學史全体に通じて、猶如何がと存せられ候部分は、往々にして有之、その取扱に少なからず當惑を感じ候へ共、何分先生御他界の今日、徒に未熱の意見を加ふるもの如何かと存じ候のみならず、亦たとひ誤りかと見らるゝものも、先生には先生獨自の意見を抱懷せられしには非るなきやを思ふ時は、輕々しく

取捨添削を加へ難く候爲め、大抵の場合は先生直筆のカードのある限り其儘に致し置き候仕儀にて、其の間言ふべからざる困惑と苦衷を感じ候。

つい脱線長々と述懐の段は何卒御笑殺下さるべく候へ共、兎に角先生の四頓房尊海に關する考證の類は何等遣り居らず候。勿論あの圖表にては、仙波の尊海より日蓮上人へ直接法門の授受ありしものゝ如く相成居候へ共、こは恐らく從來一般の傳説に基きて、其の儘に記され候ものかと愚考致され候條御承知下され度候。

猶尊海等に付ては小生も乍不及注意を拂ひ、仙波へも一二回調査に罷出候へ共、殆ど言ふに足るべき史料も無之候折柄、今後共精々御法益に蒙り度此段乍延引御返事まで如上候不備。

十月十二日。

裕慈弘。

(三) 本尊鈔の「觀心の義相」の段を吾關本法兄が事觀で見よと言つたのを百パーセント共鳴云云、然るに啓蒙十七、初に宏記の理觀とし、慧抄の事觀と爲すを、撰主は折衷して、「此下附文は理具、元意は事觀」とあるのを、「略要」にも抄出せり。

(四) 尙ほ一大事の言ふべきは、即ち「一心ニ具三十法界」の「一心」「觀ニシテ我カ己心ニ見ル三十法界」、是ヲ云「觀心ト也」の「一念」を佛果「己心」、又「是レ即己心ニ三千具足三種ノ世間也」の己心を佛果上

の「一念」「一心」にして、行者の「一念」「一心」即ち彼台家の六識陰妄の在迷の事心因心ならずして、九識本法清淨の妙心、果心、理心なりこの貴説は、我家所談の法体門、性徳門を果海流現の妙色妙心なりと謂ふ場合と、直ちに修徳修行を指す場合とを混用するものに非ざる莫き耶。抑々一念三千の妙觀は修行なり。修行は吾人在迷の因人凡夫をして從因至果、轉迷開悟、轉凡聖成せしむる在り。果上悟智の一念、一心我に於て何かあらん。然るに此義獨り吾子のみならず、山川智應氏も亦「實現の宗教」「毒鼓」「信人」等に本尊鈔の「己心の三千具足三種、世間也」の己心を本佛果上の一心と云ひ、河合日辰師疾く已に「同鈔探靈」に法界の大心也と釋せるを拙述「觀心本尊鈔大旨」に略評せり。此は是れ大に議すべし、委悉は別稿を期す。(八朶生云く、先生の此御評を得て蕞爾たる吾小論初めて宗學的檜舞臺に上されたるの榮譽を感ずる次第に候。唯茲に起觀心識論につき一言致度は、本尊鈔妙觀段の説意は實に事一念三千を明すこと元よりにして、此は委しくいへば十界事常住(先生の謂ゆる性徳門に約す)之家の十界互具(先生の謂ゆる修徳門に約す)論に相成居候。前者に約して九識清淨心、后者に約して六識陰妄心たることは動かすと存候。右の次第に付小生のいふ所に山川氏及河合辰師の説と全同に非ず、寧ろ先生の説と吻合するものと存候。此邊今一應「安心」につき再檢討、再吟味相願度、右は曾て先生の學長時代山川氏と右法門上の往復の次、屢々親しく教示

を垂れたりし以后に於て、「安心」を執筆致候事とて、決して山川氏と全同なる筈無之と確信罷在候。右御諒承賜り度、何れ委曲別の機會を期し度と存候。不宣。「終」

安國論講要を讀みて

高 田 惠 忍

拜呈、昨日は高著立正安國論講要一部惠寄難有拜受任候。諸大家の序文、題辭等錦上花を添へし編輯者宮原氏の丹誠も赤々と紅葉の夕榮えの如くかやくもうれしく、裝禎の美、印刷の鮮明、活字の大きさ、凡てに於て第一印象頗る宜敷、宗門近時の出版物中最も出色のものも存候。先生のこれまでの著書中でも最第一と存候。手にすると同時に直ちに讀書欲にそゝられ、先づ田中居士以下の序文より相初め候、さすがに文章では居士の文白眉と存じ。唯佐藤將軍の序文に於て先生に期待する所の多大なるものあるやに相感申候。品川驛頭では序文だけ見終り、一先づカバンに入れ午前十一時廿七分